

サントリー芸術財団サマーフェスティバル2014
Suntory Foundation for Arts・Summer Festival 2014
8月21〜31日 / サントリーホール

日本最大の現代音楽祭
今年にはシュトックハウゼン、2つの《歴史》

文 佐野光司

Text = Koji Sato

写真提供 〓 サントリー芸術財団

サントリー・サマーフェスティバル2014が8月21日から31日にかけて開かれる。日本最大の現代音楽祭であるだけでなく、世界にも類を見ない規模と内容だ。

これは3つの柱から構成されており、昨年からは始まった「プロデューサー・シリーズ」、長年続いている「国際作曲委嘱シリーズ」、そして若手作曲家の登竜門である「芥川作曲賞」である。

*

まず日程の早い順に紹介して行こう。初日(21日)は細川俊夫監修の「国際作曲委嘱シリーズ」で、今年のテーマ作曲家はフランスのパスカル・デュサパン(1955〜)。これはデュサパンへの管弦楽曲の委嘱作の他に、彼が影響を受けた作曲家の作品の演奏で構成される。そして25日はデュサパンの室内



昨年から始まった「ザ・プロデューサー・シリーズ」の「インプロヴィゼーションズ×ダンス」のステージ(2013年9月6日)



長年続いている「国際作曲委嘱シリーズ」で昨年行われたリゲティ《ミステリ―ズ・オブ・ザ・マカーブル》(2013年9月5日)



昨年の最終日の「演劇とオーケストラが出会うとき」《良い子にご褒美》のステージより。今年の「サントリー芸術財団サマーフェスティバル2014」では8月28・30日にシュトックハウゼンの《歴史》を雅楽版と洋楽版で聴くことができる(2013年9月10日)

楽曲の日で、「弦楽四重奏曲第2番」と「第7番」が演奏される。演奏は定評あるアルディッチティ弦楽四重奏団。彼の作品は全て日本初演だが1990年代後半から独自の境地を開いた個性ある音楽だ。

次いで「プロデューサー・シリーズ」の2年目は木戸敏郎がプロデュースする「始源楽器の進行形」(22日)、「20世紀の伝言」(28日)、「21世紀の応答」(30日)。これは今回最大の呼び物となるだろう。22日は正倉院にある古代(始源)楽器の他、古代エジプトのアンクルハープの等の復元楽器のために6人の作曲家が作曲した作品の演奏。

そして「20世紀の伝言」とはシュトックハウゼンの雅楽《歴史》(1977)の37年ぶりの再演である。木戸敏郎は早くから雅楽によ

る現代音楽を企画・委嘱しており、その最も有名な曲が武満徹の《秋庭歌》であろう。シュトックハウゼンの《歴史》も木戸の委嘱であったが、日本初演の際にきわめて評判が悪く、それを境に日本でのシュトックハウゼン人気が凋落したほどであった。シュトックハウゼンはこの曲をヨーロッパでも演奏できるようにオーケストラ版(1979)も作っており、これはヨーロッパでは大好評であった。30日はこのオーケストラ版の《歴史》で、今回2つの《歴史》を聴ける。

20世紀〜21世紀にかけて現代音楽の価値観は明らかに変わってきた。《歴史》も37年経った今日、どのように評価されるだろうか。また同じ曲のオーケストラ版の《歴史》は巨大なオペラ《光》の1部となったもの。それぞ

れの日に一柳慧の雅楽、三輪眞弘のオーケストラ曲の新作も披露される。

「芥川作曲賞」はすでに第24回を迎える。ここでは一昨年芥川賞を得た新井健歩の新作のほか、昨年中に初演された日本の作曲家のオーケストラ作品の中から、3人の審査員(小鍛冶邦隆、福土則男、望月京)が候補作品を選び、31日に演奏して決める。その決め方は演奏終了後、舞台上で3人が公開で討論し、芥川作曲賞を決めるという独特な方法をとっている。3人がそれぞれ別の作品を推した時には当然採りて司会者を困らせる。今年はどういうようになるだろうか。スリリングな賞の決め方である。

お役立ち情報
どこの席で聴いても楽しめるホール

サントリーホールは東京の中心部アークヒルズにあり、5つの地下鉄駅から行けるという地の利を得ている。ホールは舞台を中央に客席が取り囲んでいるので、どこで聴いても面白い。舞台の真横で聴くとオーケストラのメンバーがよく見え、後ろからなら指揮者を正面から見ながら聴ける。昼間六本木の東京ミッドタウンで遊んでから夜にホールなんてことも楽しい。(佐野光司)